
もう！たまりません！

わんちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう！たまりません！

【Nコード】

N4796D

【作者名】

わんちゃん

【あらすじ】

たった一人の少年が描く、笑いあり涙あり恋愛ありポロリあり（？）の波乱万丈人生を御堪能あれ！

ローテーション・プロローグ

『俺はなぜこんな力を手に入れたのだろう。』

今までずっと思っていた。鉛すら握り潰してしまうこの拳を、何度自ら切りはなそうと考えたろう。だけど今やっとその意味がわかったんだ――

「――高校から転入してきました、さえきひろなり冴木裕生です。よろしく」

季節は7月の半ば、夏も猛暑に近づいた頃俺はここ『角川高校』に転入してきた。以前いた高校でちょっとした騒動を起こしたのが原因である。その騒動とは――

「ねえ、あの人が高校の生徒を何人も病院送りにした人？」

「静かにしなよ！もし聞こえたら私たちまでそうなるかもしれないじゃない!？」

いやいやその右後ろの女子生徒達よ、ばっちり聞こえてますが？とまあ、こんなわけだわ。ちなみに彼女達が言ってることは嘘では

ない。まぎれもない事実なのである。しかし全てではない。そこにはある少女の悲しみに満ちた出来事があった。純粹な恋心を傷つけたことに対する、俺の怒りがあったのだから……。

転入してから1ヶ月、もちろん友達など出来ずにいた。屋上は誰も近づかないから、授業の時間以外ではほとんど屋上で過ごしている。掃除当番も最初の頃は同じ班のやつらと行っていたが、コソコソ悪口を言われるのが苛ついたからもうやってない。

「……ふうっ」

今は俺はまさに屋上にいる。来客がいないこの場所だけが、俺の安らげる唯一の場所だった。

柵に背を預けながら携帯を開いた。『あの日』から絶えず毎日『あの少女』からのメールが来る。恐らく『アイツ』が心配で連絡させてるんだろうな。

『アイツ』とは小さい頃からずっと親友だった。だから『あの日』から『アイツ』と『あの少女』との恋愛が続いていることがなによりも今の俺にとっての支えになっている。だが、まだ一度も返事は出していなかった。『あの約束』をまだ果たせずにいたから。

生徒会（前書き）

今回もローテーションです。

生徒会

それは8月のことだった。

俺は生徒会にクラス担任から推薦され、生徒会に入ることになったのだ。

担任の女教師葛城命は『あの少女』の姉で、俺の数少ない理解者の一人である。だからどれだけ抵抗しても無駄だということを悟った俺は、現在大人しく生徒会室の前に立たされてるわけだが……気まずい。なんてったってこの学園きつての問題児のこの俺が、あれですよ？学園の顔ともいえる重要な組織に入るわけですよ？世も末だとは思いませんか？

だがまあ、さすがに廊下でこれ以上汗だくになるのは嫌なので、とりあえず2・3回ほどノックをする。

「ちわーっす！みかわ屋でーす！」

とりあえずサ●エさんのさ●ちゃんの真似を試みる。するとドアを開けてノリの良い返事をしてくれた。

「はーい（がちゃ）！あら●ぶちゃん、ごぶさ……た………キユ」

……しかし相手が俺と気がついた瞬間、この女子生徒様は気をお失いになられたわけですよ、はい。いくら俺の体が強かろうと、心はこう見えてピュアなんですよ？そんなことを考えていると、ドアから別の女の子がこちらに気づいて出てきた。

「なにかありましたか？」

鼻が高く目が透き通っていて、黒髪のロングに桃色の唇。うむ：

「100点…だな」

「…？なにが100点なのでしょう？」

どうやら口に出ていたようだ。どうやらこの俺のピュアな心は正直ものらしい。つまり、俺はまだ少年の澄んだ心を忘れていないわけだな、うん。…あ、返事するの忘れた。

「まあ、気にしないでくれ。てか、君は俺と話すのが怖くないのか？」

そんな俺の問いに対し、彼女は表情を変えずに返事をする。

「あなたのことは既に葛城先生から聞いているわ。もちろん、過去のことも全て…ね」

なるほど、そういうわけか。

彼女は話を続ける。

「それじゃあ反対に聞くけど、なぜ私が貴方を怖れると思ったの？
貴方は私に危害でも加えるつもりだったのですか？」

「いや、ないね」

「そう。なら、それで良いじゃない。それより、ようこそ我が生徒会へ。私は会長の植木瞳^{うえきひとみ}よ。よろしく」

そういうと会長は手を出した。

「ああ、こちらこそ」

それに対し俺は握手をしながら答えた。

生徒会室に入って会長から仕事の内容やら注意点やらの説明を受けていると、先ほどの気絶した少女が目を覚まし起きあがった。あゝ焦ってる焦ってる。

「はわああゝゝゝゝゝっ!?!」

あつ、何も無いのにつまずいた!?!

「痛ッゝゝゝゝゝ!?!」

転んだ!?!

「もう!なんで貴様のようなやつがこんな場所にいるのだ!?!」

素直クールだと!?!?てかこの口調でさ●ちゃんのネタについてくるとは……俺は今まさに新たな歴史を垣間見たのか。

「やめなさい葉月!……彼は葛城先生の勧誘で此処に来たの。あなた

だってちゃんとその話を聞いてたでしょう？だから仲良くしなさい」
会長は葉月と呼ばれた女の子に落ち着きながらも力強い口調で言う。
一方葉月は納得がいけないようで俺を睨み続けながら話す。

「こんなやつと共に活動しろというのか！？いくらお前の頼みでも、私はこやつのが好かん！」

ああそうかよ俺もお前が嫌いだよ。

「…会長、俺この役は降ります。やっぱりこいつ同様俺みたいなのを好ましく思わない人間は腐るほどいる。そんなやつらと同じ人間といっても仕事なんかできやしない」

俺は会長にそう告げ、ドアノブを握り開ける。会長は何か言おうとしていたが、葉月がそれを遮るように話だした。

「ああやめろ。お前みたいな化け物となんか誰が一緒にいられるかよ」

俺はその声を聞きながら苛立たしさとともに力強くドアを閉めた。

俺はそのまま屋上に向かい、屋上に着くと昼寝を始める。

もう何度も言われた言葉。『化け物』なんて言われ慣れたと思って
いたが、本当は全然克服できていなかった。だが悲しくもこの言葉
に傷つくことで、自分も1人の人間なんだと自覚出来るという事
実はなんとも複雑なもんだ。

こんなときは、どうしようもなく会いたくなってしまう。かつての

友人達に……

『キャー!!』

叫び声!?!外からか!?

俺は慌てて起き上がると、屋上から校庭を見つめた。しかし、誰もいる気配はない。

『誰か助けて!!誰かあゝ!!』

校舎裏の方か!?

俺は校舎とは逆の方向を見る。すると、そこには何人かの女子に囲まれた女の子がいた。殴られたり髪を引っ張られたりされているから、虐めで間違いないだろう。

気がつく俺はそこに向かい走り出していた。なぜ?そんなもん知るかよ!

俺が着たとき、女の子は既に制服や髪がぼろぼろになっていた。

「てめえらなにやってんだ?」

俺は虐めていたやつの中かのリーダーらしきやつを後ろから掴

み、低い声で怒りを堪えながら言った。

「は！？ んだて…め…………え…！？」

最初はドスの効いた声で言っていたが、俺と気づくなりその顔が青ざめていった。

「お前ら…ここで死ぬか？」

俺は地面から岩を掴むと、彼女に見せつけるように握り潰した。

「ひい！？ 化け物だああ！！」

彼女達はそう叫びながら慌てて逃げていった。

「…………ふうっ。大丈夫か？」

俺はそう言くと、虐められていた女の子に手を差し出した。しかし……

「ひいっ！？」

俺をに怯えながらその女の子も逃げていってしまった。

最初からわかってたさ。ここには俺を認めるものは何もない。きつとこのまま終わりになるのだろう。

だが俺はこの少女との出会いが俺の今後の人生を大きく変えていくとは、この時は思いもなかっただろう。

友（前書き）

読者の皆様、大変お待たせいたしました。

今回から毎週更新出来るよう努力致しますので、ヨロシクお願いします。

友

次の日、不思議なことがあった。

俺がいるクラスには、実は停学処分を受けているやつがいる。なんでも、そいつは俺みたいに生徒を何人も病院送りにしたらしい。そして、今日がそいつの登校してくる日なのだ。……おっ！どうやら彼が来たらしい。容姿は緑髪のもヒカン、身長は180位で俺よりも少し高く鼻が高くて目付きがかなり悪い。

彼が入ってくると、教室にいる全ての生徒が陰悪な眼差しで彼を見つめていた。彼は俺の前の席なのだが、彼は自分の席に着かずに……俺の横に来た！？

なんだ！？なんなんだ！？コイツはまさか俺にケンカを売りに来たのか！？

かなりガン見なのだが、もちろん周りの生徒は先ほどとは違い面白いものでも見るかのように笑いはじめていた。

そして、その彼が口を開いた。

「……昨日は世話になったな」

………はっ！？まてまて、俺はコイツとの接点など皆無なのだが！？

ちょっと待て……昨日？昨日あったことといえば、生徒会と少女の虐めくらいだった筈だが……どっちの関連性だ？

「亜季が虐められてたのを、助けてくれたんだろ？」

ああ、そっちの娘ね…

「べっ、別にあんたの為なんかじゃないんだからねっ！／＼／」

それに、結局怖がらせちゃったみたいだし…

「……………」

いや、ボケたんすけど？

すると、

彼はゆっくりと口を開いて言う。

「おまえ…俺たちみたい不思議な力があるんだろ？」

「！?…俺“たち”って、どういうことだ!?!」

「お前みたいな力を持ったヤツらに合わせてやる」

ヤツら…ということとは、複数いるってことか!?!

「……お前の名前は？」

俺はやや真剣な顔でモヒカンに聞く。

「石狩太一だ」

「わかった。石狩はどんな力が使えるんだ？俺は…こんなだ」
俺はそう言うと、バックから“ゾウが踏んでも割れない筆箱”を取り出し、ソレを握り締めて砕いてみせた。

「……なるほど、握力か……」

わかったの！？あんたすげえよ！！漢だよ！！

「俺は…これだ」

そう言うと、石狩はなぜか俺のバックから“ゾウが踏んでも割れない（以下略）”を取り出し、その“ゾウが踏んでも（以下略）”に人差し指を押し付ける。すると、なんと“ゾウが踏（以下略）”が、押し付けた部分から真っ二つに割れたのだ！？

あ、このバックになぜ“ゾウ（以下略）”があるのかはあえて気にしないでくれ。

「すげえなおい！」

「まあ、こんなところだ。筆箱壊しちゃって悪かったな」

あ、とうとう製品名も無視したよ。

「別に気にするな。コレでお前が同じだと分かったんだからな。…
…苦労したんだろ？」

何に苦労したかはあえて聞かなかった。コイツならわかる筈だから。

「まあ…な。会わせるのは昼休みで良いか？そいつらと集まって飯を食うんだが…」

「わかった。じゃあ、昼休みに読んでくれ」

石狩は頷いて席に座る。そして、またこっちを向きながら言う。

「言い忘れたが、名字はやめてくれ。名前の方が馴染む。俺も名前で呼ぶからそれで頼むわ」

「…わかった」

結論

こいつ、実は良いヤツなのかもしれない

昼休みに入ると、太一は椅子に座って教科書を机にしまっている俺の前に来る。

「行こうか」

“行く”とは、もちろん太一のお仲間の所にある。

「おう！」

俺は明るい声で返事をする、太一と一緒に教室を後にした。

数分後、校舎から少し離れた所にある部室棟に着いた。そこから太一の後について2階に上がり、ある部屋の前で立ち止まった。

「ん？どうしたんだ？」

“どうしたんだ？”じゃねえよ！ちよつ、なにお前平然とドアノブなんか握ってんの！？良く見なさいよこの部屋の名前！こ……ここ……ここは……！？

「女子更衣室じゃねえか！？」

そんな驚いている俺を、太一は軽くスルーすると、何食わぬ顔で更衣室へと入っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4796d/>

もう！たまりません！

2010年10月17日02時21分発行